



アーカイブワークル

プロジェクトで収集した資料の一部を手にとって見るように作られた移動式資料室。
普段はせんだいメディアテーク2階の映像音響ライブラリーに設置されている。(撮影：川辺明伸)

3がつ11にちを わすれないためにセンター

Center for remembering 3.11

「3がつ11にちをわすれないためにセンター」(通称「わすれん!」)は、
せんだいメディアテークが市民やアーティスト、
各分野の専門家と協働しながら、
東日本大震災とその復旧・復興のプロセスを
独自に記録発信していくための
プラットフォームとして、震災直後の
2011年5月3日に開設された。
震災から11年が経った現在も、
「わすれん!」は映像・写真・音声・
テキストなどさまざまなメディアを
駆使しながら、震災と復興に取り組む
市民のあゆみを記録・蓄積・発信する
活動をしている。
今回はこの「わすれん!」の運営を手掛ける
甲斐賢治さんにお話をうかがった。

甲斐賢治 | Kenji Kai

せんだいメディアテーク アーティストック・ディレクター／大阪生まれ。主に地方行政の文化施策に従事、企画、運営に携わりとともに、複数のNPOに所属。社会活動としてのアート、メディア実践に取り組んできた。2010年春より、せんだいメディアテーク勤務。2011年度芸術選奨・芸術振興部門文部科学大臣新人賞受賞

聞き手

岩佐明彦 | Akihiko Iwasa
法政大学／会誌編集委員会委員長

佃悠 | Haruka Tsukuda
東北大学／会誌編集委員会委員

前田昌弘 | Masahiro Maeda
京都大学／会誌編集委員会委員

費川雪=文

「わすれん!」創設

— 「わすれん!」立ち上げの経緯を教えてください。

甲斐 震災をきっかけにこの取り組みを開始しました。メディアテークは、美術や映像を用いて市民の学びをサポートする生涯学習施設なので、直接的な生活支援を担うことはできません。そこで、学びの機会をデザインする観点から、震災や被災者に対して何ができるか・何をすべきかを思索し、「わすれん!」が生まれました。

震災後わずか2カ月で活動を開始したのは、仙台市がメディアテークの再開を急いだことが理由の一つです。震災の被害に加え、連日の震災一色の報道によって気持ちが滅入っているであろう市民に対して、図書館の一刻も早い再開が、震災以外の情報に触れる機会につながり、混乱を鎮めるひとつの手立てだと、市は考えたのだと思います。そこでゴールデンウィークを目標に再開が進められ、「わすれん!」もそれに合わせて開設しました。

そもそも震災以前から、メディアテークは市民と協働し、昔の街並みの写真を集める「地域文化アーカイブ」の作成に取り組んできました。それが震災記録に特化されたのが「わすれん!」というわけです。「わすれん!」の取材参加者は累計201名、集まった資料は写真が7万9,000件、映像記録1,332件、音声97件となっています(2021年3月時点)。

「わすれん!」の活動

甲斐 アーカイブ作成のワークフローは4段階に大別されます。「記録・収集」したデータを「整理・保存」そして「資料化」して「公開・利活用」につなげていきます。

まず「わすれん!」の大きな特徴は、「記録・収集」を「参加者」と称される市民やアーティスト、映画監督な

どが主体的に行っている点です。参加者登録後は個人が自由に取材をし、写真や映像、音声を収集します。その際メディアテークは内容について一切関与しません。あくまでプラットフォームとして機能し、参加者の主体性を尊重し、スタッフは参加者同士の交流を促すことに努めます。

「記録・収集」でもう一つ特徴的なのは、収集後に大きな問題となる肖像権や著作権のクリアが見据えられている点です。報道では免除されても、メディアテークのような文化施設で長期にわたって写真や映像を保存し、記録資料の市民利用などを促すには、この権利処理が必要不可欠です。そこで参加者には取材前に簡単なレクチャーをし、取材時に対象者から肖像にまつわる許諾を得て、また、データをメディアテークに預ける際には包括的な利用許諾を書面で交わすという作業が不可欠であることを理解していただくよう努めています。

こうして寄せられた記録は、主にメディアテークのスタッフが「整理・保存」し、「資料化」します。「資料化」とは、言い換えれば「文脈化」です。キュレーションと言っても良いと思います。文脈を与えることで世の中に接点を作り、一定の訴求力のある資料にまとめあげます。「利活用」のモデルを作ることも、同じく重要です。潤

沢な予算とはいかない地方の文化事業なので、年度ごとに成果をアウトプットしていくことにも注力せざるを得ません。寄せられる記録の量が膨大すぎて、正直なところ現在も整理が追いついていませんが、集まった資料の見せ方を工夫し、さらに市民との協働を通して「利活用」や「発信」につなげていくことが、今後も続く課題だと考えています。

これまでのプロジェクトを紹介すると、たとえば「リアルふっこうボイス」という、震災直後から始まったプロジェクトがあります。プロジェクトのメンバーであるまちづくりに取り組む学生や専門家が各自治体の復興現場に赴き、現地住民にインタビューしてアノニマスな声をアーカイブしていく。それと並行して、録りためた音声を聞きながらメンバーで定期的に意見交換を行い、その様子もインターネットで放送するという活動です。メディアテークでは、こうした成果を預かり、整理したのちにweb上で公開しています。

また「3月12日はじまりのごはん」というプロジェクトは、震災時の食事にまつわる写真を集めて展示し、来場者にもふせん紙に思い出を書いてもらう参加型の取り組みですが、参加者のグループとスタッフが話し合いながら公開や利活用の方法を決めていった事例です。



わすれん！ 録音小屋
震災にまつわる話を収集するために作成された小屋。
二人一組で入室し、震災にまつわる話を録音していく。
録音された話は、後世に伝えていくことを目的に保存され、公開される。(撮影：川辺明伸)

変化と課題

— 東日本大震災から11年が経過しますが、活動や記録にはどのような変化がありましたか。

甲斐 最初は、とにかく率直に現場を撮っていたものが多かったように思います。しかし、目に見えていた被害が“復興”によってなのか、見えにくくなってきた2017年ごろから、寄せられる記録の種類が変わってきたように思います。出来事の記録から、その解決のためのプロジェクトの記録や、記録を使った表現へと、内容が変化してきています。たとえば、原子力発電所の事故の影響を受けたとある村の産業再生に取り組むプロジェクトを記録にまとめて預けに来た方もいます。

他にも大きな変化としては、震災直後は語ることが難しかった人が語り始めたり、言葉にできていなかったエピソードや想いが語られる時期にさしかかるのではないかと思います。メディアテークでは、9・11の証言を集めていたアメリカのNPOの手法を借りて、2018年から話し手と聞き手の二人が個室で行った会話を後世に伝えるプロジェクト「わすれん！ 録音小屋」を開始しました。

こうして記録資料をこつこつと残していくことに、いったいどのような意味があるのか。一般的に示される「震災の伝承」などについても、疑問を感じることもあります。しかし、やはりメディアテークは生涯学習施設であり、機械的に震災記録をアーカイブしているのではなく、参加者の記録活動の経験そのものを学びの機会として担保するプラットフォームなんですよ。だからこそ、この先も、これまでの地道な活動の継続に加え、また、新たな活動への呼びかけとしても、市民とともに資料の新しい利活用のモデルを構想していくべき時期に来ていると考えています。

記憶と継承

— 最後に「記憶」や「継承」について、甲斐さんの考えをお聞かせください。

甲斐 具体的に何を継承していくのかは、とても難しい問題です。僕は、メディアテークはあくまで生涯学習のプラットフォームとして、いつであっても、利用者が震災に触れることのできる、考え続けられる機会を提供する場所だと捉えています。そしてその際、何を継承するのかは、それぞれが考えることなのだと思います。これまで、個々の資料の内容理解には努めながらも、立ち入らないようにもしてきたように思います。少しドライに聞こえてしまうかもしれませんが、その中身に少し距離を置



「3がつ11にちをわすれないためにセンター」のウェブアーカイブ



プロジェクトで集められた写真、映像、音声を視聴できる。時間軸やマップ、テーマなどで検索も可能。
(<https://recorder311.smt.jp>)

くことで文脈化が可能なのだと思います。震災で大切な人や場所、時間を失ったという思い出の記録資料に、もしスタッフが一つひとつ寄り添い、一つひとつ踏み込んでいくとすれば、すぐに抱えきれなくなってしまうように思うのです。

報道などによって、僕たちは震災の記録の専門家のように書かれてしまうことがありますが、まったくそうではありません。アーカイブしていくこと以上に、「メディアプラクティス」——つまり、市民がメディアに対して受け身の状態から、メディアを獲得し自主的に発信できるようになっていく、そのことを重要視し、手助けするのが僕らの仕事だと考えています。その観点から、「わすれん！」には意義があったのか、何度も問い直していく必要があるでしょう。

そのために新しく始めた活動の一つが、「ダイブわすれん！」というプロジェクトです。まず、映像研究、アーキビスト、演劇の演出家など多様な専門家に、これまで蓄積された「わすれん！」の資料の海に“ダイブ”して読み込んでもらい、その後、資料についての評価や利活用のアイデアについて話し合ってもらう座談会の開催を予定しています。11年が経過したいま、あらためて震災の記録・記憶を未来に継承しつつ、同時にこれから先も「メディア」や「アーカイブ」という言葉を手がかりに、自らの手で記録や表現を实践する経験や、資料から発見し学ぶ機会などを通して、一人でも多くの市民に「メディア」を使いこなす術が獲得されていくこととなればと思っています。

2021年11月8日、オンラインにて